ピルグリムメイデンⅡ
白装の騎士

狩野景
挿絵／ぽち。

あとみっく文庫

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

THE CHRONICLE COLLECTION

kousaka rein

紅坂玲音

不死者を討滅する教皇庁異端審問局の巡礼聖女。口が悪く態度もでかい傲岸不遜な少女。

georg vernstein

ゲオルグ・ヴァーンスタイン

不死者。三真祖の一角である“漆黒のリヒャルト”の手下。

eugene faust dio

ユージーン・ファウスト・ディオ

“白鎧のディオ”の異名を持つ不死者の王。冗談めかしたキザな態度で女好き。

alicia argento

アリシア・アルジェント

不死者を統べる“三真祖”の一人。普段はいたって普通の子供っぽい女の子。

saiki tohma

斉木冬馬

玲音によって不死身の身体にされた高校生。とある条件によって女の子になってしまう。

tamai nanako

玉井奈々子

冬馬のクラスメイトで彼に密かな想いを抱く。内気で人見知り。

giulietta masina

ジュリエッタ・マッシナ

玲音を補佐する巡礼聖女見習い。かなりのドジでまったく空気の読めない天然系。

CONTENTS 目次

◎ 序　　文 …… 007

◎ 序　　章 …… 008

◎ 第 一 章　**夜会** …… 011

◎ 第 二 章　**追憶** …… 079

◎ 第 三 章　**迷えし子羊たち** …… 104

◎ 第 四 章　**望みと喜び** …… 178

◎ 第 五 章　**胎動** …… 243

『第一章　夜会』より

〝魔幻師〟自身は自ら手を下す必要すら無しと、憂鬱な美貌を陰湿な笑みで歪ませる。
指揮棒を振るうように、手に持ったステッキを掲げていた。
「そうです、シスター・レインの〝アイアン・メアリー〟ならっ！」
少数相手に真価を発揮する〝ジェルソー＝ミナ〟とは逆に、彼女のチェーンソーは一振りするだけで、殺到する敵の群れを蹴散らせる。
パートナーの姿を求めて下着店の方を見ると、店内にいた者たちは全員外に退避したようだ。店の前、玲音と冬馬が睨み合い、
「だから、オレがカノジョとデートするのの何が悪いってんだよ⁉」
「はぁっ⁉　あたしの下僕で所有物の分際で、そんな自由が許されると思ってるの？　やれやれ、とんだ勘違い野郎だわ」
「そっちこそ勘違い女だろ！　一度医者に頭の中診てもらえよ。もう手遅れだろうけどな。それとお前、昨日勝手にオレが買っておいたアイス食っただろっ‼」
「ああ、あのクソ不味いのあんたが買ったの？　あずきマンゴー味ってどういう好みしてんのよ⁉　不味すぎて気が遠くなりかけたわ‼　慰謝料よこせっ！」
「美味いだろっ⁉　あずきマンゴー味っ！　食っといて文句言うなっ、弁償しろっ‼」
痴話喧嘩がまだ続いていた。しかもさっぱり関係ないもの凄く低次元な言い争いにまでなっている。その様子を面白そうにクスクス笑いながらアリシアが傍らで見物し、その生

徒会長にしがみつくようにして、奈々子が周りの超常的な恐怖に身を震わせる。
「シ、シスター・レイン……。冬馬さんまで……。ひゃううっ！」
さっぱり頼りにならないパートナーと少年にガッカリきた。
それでも必死に群がる触手を切り捌く。
（駄目です。埒が明きませんッ。こうなったら……）
一か八かに賭けるしかない。普段はノロマだがここ一番の突進力には自信がある。
「でぇえええぇいいいいっ!!」
決心すれば早い。防御を止め襲われる人々を守るのも放棄し、ジュリエッタは触手が絡みついてくるのにもお構いなしで全力の跳躍を試みた。
要は一撃で敵本体を仕留めればいいのだ。
失敗したらと思うと不安になるが他に手がない。
並外れた勢いの突撃に絡みつきかけた触手も何本か引き千切れる。
「む……ッ」
急激に迫る群青色の巡礼聖女に、不死者の憂鬱顔が驚きを浮かべた。
「はぁあああっ！」
胸元で交差させて構えた二本の刃を、力の限り突き込む。
場所はどこでもよい。突き刺さりさえすれば、処女の聖血が不死者を滅ぼす。だが、

「レゥラュム・シェム・セト……」
手にした杖で素早く印を切りながら〝魔幻師〟が呪文を唱える。
その敵の心臓を抉る寸前にまで迫った切っ先が、刹那、突如出現した魔法陣に飲み込まれ、そしてあらぬ方角からジュリエッタ自身に向かって突き込んできた。
「――ひうっ⁉」
ほんの一瞬だが空間をねじ曲げ、攻撃を敵自身へと返す高等な魔導の技法。
間一髪空中で体勢を変えて避けたジュリエッタのバランスが崩れる。
「はわぁああっ‼　し、しまったなのですっ！」
その四肢へと幾本もの触手が、一斉に絡みついた。
為す術もなく、濃紺の修道服を纏った肢体が吊り下げられる。
「あうっ‼　このっ！　は、放しなさいっ‼」
強い触手の締め付けにサーベルを落とした。脚は比較的自由になるのだが、両手は肩口の辺りで固定され思うようにならない。もがくと修道服の裾が捲れてスリットから黒いストッキングに肉感的なラインを浮かび上がらせる脚がさらけ出される。
（あう……パンツまで見えちゃいそうですぅ……）
恥じらいに抵抗が弱まった瞬間。いきなりに触手は、男の勃起を思わせる魔生物の顔前へ修道女を差し出した。十個余りの眼球がギロリと一斉に粘つく眼差(まなざ)しを注ぎ込む。

「ひうっ！」
人並み外れた胸の膨らみと、スカートの下、まだ辛うじて下着を隠せている股間にその視線が集中した気がして、ぞわわと背筋に寒気が走る。
（あ……う……ぅ……、や、やです……。見ない、で……）
孤独な戦いの中、廃病院で肉体を弄び尻を犯してきた不死者たちの淫欲に血走った目つきと、いまの視線を同種の物に感じた。
「ぐぉぁあっ！　ひ、ひぁっ!!　助け……ぎぁあああぁ――――ッ！」
辺りを窺うと捕まった人々は同じように魔生物の目前へと掲げられていた。男は無数の細かい歯に噛み千切られ、断末魔の悲鳴を迸らせて飲み込まれてゆく。
「ふん。硬くて不味い牡の肉など、餌程度の価値しかないからな」
「あう……なんてこと……」
忌々しげな不死者の言い草に、おっとりとした眼差しが憤りに険しさを増す。
そして女性たちは、惨劇に愕然となるジュリエッタも含めて、
『げぼぉおぁあぁっ！　ごぶっ!!　ぶりゅっ！　ぶりぶりぶりびゅるるぶばぁあぁっ!!』
円筒状の口腔から溢れる、大量の粘液を頭からぶっかけられた。
「――ひぃいううっ、な、なんですかっ!?　これは……あぁあっ！」
色は無色透明。しかしその匂いが、精液を濃厚にしたような生臭さ。

「あふうっ！　く、臭い……です。こんなの、イヤぁ……」
女を孕ませる液体へ恐怖を感じつつ、えも知れない魅惑に冷静ではいられなくなる。
嫌悪に顔をしかめ、髪にも肌にも修道服にもネットリと染み込んでくる感触から逃れようとするが、その蠢きがどことなく男を誘うような媚びた仕草になっていた。
無意識のうちに股をもじもじと擦り合わせる。ストッキングを吊るガーターベルトと、大人びた黒のショーツが見えているのにも気づかない。
ジュリエッタの甘く上擦った吐息に同調するように、魔生物に捕獲された他の女性たちからも切ない呻きが漏れ始める。
「さあ、我がレプタイルたちよ、牝肉どもの汚らわしき純潔を奪い乱し、我が輩が食するに相応しき供物へと調理せよっ!!」
人間を食物としてしか見なさぬ、欧州より訪れた不死者ならではの傲慢な物言いに、亜麻色髪の巡礼聖女がギリッと奥歯を鳴らす。
だが主の命令と共に蠢き出した触手に、粘液まみれとなった肌を撫でられた瞬間、
「ふぅあぁあああっ!?」
怒りも危機感も何もかもが、弾けるような悦波に飲み込まれた。
「な……なんです、か、こ、これぇ……ひゃううんっ！」
悩乱的な異臭を放つ粘液が、にゅるにゅると肌全体に過剰な潤滑をもたらし、衣服の上

からだというのに局部を直接舐められているかのような感触をもたらす。
（ひぁ……、嘘……ぉ、こんなのが、気持ち、イイ、なんて……ひあっ!!）
もうすでに、甘い喘ぎを漏らして股ぐらを緩め腰をくねらせている女性たちもいる。
「うぐぅ……こんなの、気持ち、よくなんか……ないっ、ですうっ！」
少しでも気を緩めれば他の少女たちと同じに、はしたない様を晒してしまいそうだ。
細腰に巻き付きながら尼僧服の下へと潜り込んだ肉太に背筋を愛撫される。
太腿を尺取虫（しゃくとりむし）のように這い回られる感触に下半身が弛緩（しかん）しそうな心地よさを堪（こら）え、もうすでに媚びた音色になっている声で強がりを言う。
その様を、ゲオルグが陰湿な目でふん、と嘲笑う。
途端に肉蔓の蠢きが大胆さを増した。
ヌメリをふんだんに纏わせながら修道服の裾より潜り込み、乳房へ易々と到達する。
「はわっ！　だ、だめですっ!!　そんなところっ！　――あぁぁうううっ!!」
たとえ手が使えたとしても防ぐことは不可能だっただろう。異臭ローションの尋常ではないぬるぬるに柔房を捏ねられて、脱力の悲鳴を崩れさせる。
その間にも触手が二本、三本と次々に絡みついてくる。尼僧服の胸元をはち切れんばかりに膨らませる巨房をゆさゆさと揺らしてジュリエッタの甘美を急速に昂らせてゆく。
「お、お乳ぃ、だめですうっ!!　そん、な、されたらっ！　ひっ!!　ンンンッあぁっ！」

巨乳は鈍感だなどと言われるが、そんなことはないとジュリエッタは常々思っていた。それどころか重さがある分だけ少し激しく動くだけでも激しく揺れて、ブラジャーの裏地に乳首が擦れすぐ変な気持ちになるほどだ。

ただ走ったり、剣の稽古をしていただけなのに敏感に開発された乳首。その悩ましい丸粒を容赦なく転がされ、ビクンと打ち震える。異臭汁を浴びせられたときから熱く疼いてきていた下腹の奥が、トクンと脈打ってしどけない雫をとろりと股ぐらに溢れさせた。

（はうぅ……、やぁ……そんなぁ、わたし、濡れ……て……）

意識すると恥ずかしくて情けなくてたまらない。神に仕える身でありながら、屈辱的な仕打ちに対して自ら求めるような反応を身体が示したのである。

顔を赤らめ股を窄めようとするのだが、

「ほわっ⁉」

するん、と尻を撫でられた。もちろんトロトロのヌメリ感たっぷりな触手に。

堪える暇もなく、勝手にパカンと脚が開いた。

先ほどから太腿をにゅるにゅると愛撫され続けていて、脚の踏ん張りが効かなくなっていたのだから無理もない。だが慎み深い心根の少女は顔を真っ赤に染める。

（あぅ……、こんなの、冬馬さんに見られたら……）

出会ったときから親切にしてくれる少年にだけは、情けない姿を見せたくない。恐る恐

る様子を窺うと、彼は玲音との口論に夢中でこちらには気づいていない様子だった。
（まだ、シスター・レインと……）
ホッとする反面、なぜか残念な気がした。
（あのときは、穢されたお尻をお口で……綺麗にして下さったのに）
不死者に犯されたアナルから精液を吸い出してもらった、どれほど礼を尽くしても感謝しきれない彼からの労りを思い返し、恥じらい混じりの歓喜に身がくねる。
あのときの快感と至福の思いをもう一度味わえたならば……。沸き立つ昂りに、加勢もせず彼と顔をつきあわせているパートナーへの嫉妬が疼く。その隙だらけな身体を触手は好き勝手に翻弄し、ヌメリに任せて下着を捲り返し股ぐらと尻房の谷間双方に忍び入る。
「ひふぅううっ。ふ、ぁあああっ、そ、そんなぁああっ、はぁんっ！」
触手の先端が細かく分かれて、イソギンチャクの触手のようになった。
その一本一本が肛門へとへばり付き、菊皺の一筋一筋を捲り返すように擽ってくる。
「く、くすぐったぃ……ふわっ!! は、あぁ～～～っ！」
浮き立つような刺激が、冬馬の舌に舐めしゃぶられたときの歓喜を思い出させる。
嬉しそうな嬌声を張り上げて媚びるように尻を振りたくった。
「これほど早く快楽に堕ちるとは。ずいぶんと慎みのない巡礼聖女もあったものだな」
周りを見ても他の女性たちは、触手のおぞましい淫撫に抗おうとしている。

だらしなく顔を呆けさせるジュリエッタに〝魔幻師〟が軽蔑の眼差しを注ぐ。
「――ち、ちがいますうっ!!　快楽になどっ、はうっ。や、やめなさいっ。このようなことっ、やめ……ッ！　あ、あぁああっ!!」
火がついた牝の本能はもう完全には押さえ込むことが叶わない。緩む肛門の内側にまで細かな触手が潜り込んでのたうち、キュンと括約筋が締め付けられる。
さらにはゆるゆるに綻んだ女裂の肉花弁を、くぱぁと左右に開かれた。
「ひはぁあっ、だめっ、そこだめなのですっ!!　あ、開けないでっ！　いやぁあっ!!」
自然にひゅくひゅくと膣口が収縮を繰り返し、膣内に溜まった蜜汁を溢れさせた。
これでは、膣穴へとなにか太い物を挿入されたらひとたまりもない。
巡礼聖女として、不死者と戦う術を失ってしまう。
肉蔓に揉み嬲られぶるんぶるんと行儀悪く弾む爆乳を越して、恐る恐る股間を覗き見ると、陰茎状に先端を膨らませた男の腕ほどもある極太な触手が、じりじりと迫っていた。
「やぁあっ！　い、いやぁあああぁ――――ッ!!　ふぉぐぅううっ！」
恐怖に頭から血の気が引き目の前が暗くなる。
腰を引こうとするが、空中に抱え上げられた状態ではどうにもならない。
金切り声で悲鳴を上げるその口へと、乳房の谷間を割って胸元から飛び出してきた触手がめり込んだ。精液臭い汁をぶちまけながら乳谷ごと口腔を激しくストロークする。

（あぐぅううっ！　だめ、ですぅ。たすけ、て、冬馬さん……っ）
喉の奥を圧迫される苦しさに白目を剥き、涙を溢れさせる。それでも触手に弄ばれる敏感部から否応のない歓喜が湧き上がり、淫らに肉体をくねらせる。
その姿を、ようやく思いが通じたのか、ふと振り向いた少年の目が捕らえる。
（あ、あぁあっ！　い、いやぁあっ!!　見ないでくださいっ！）
驚愕に見開かれた彼の眼差しに、自分がどのような恥ずかしい姿を晒しているのか気づき、ジュリエッタは胸が張り裂けそうな恥辱に呻きを上げた。その瞬間、
「ふぉぐぅううっ！　ふはっ!!　も、もふぅうう――――――っ！」
尿道へするりと潜り込んでくる細触手の不意打ちに、背筋が凍り付く。
「へぁあああっ！　ふぁ、ふぁむぇえええっ!!」
膀胱から直接に尿が導き出された。
（あああああ、あ、い、いやです、ぅ。お、おしょうすい、出て……）
括約筋を懸命に引き絞ってもさっぱり手応えを感じられない。
（ンッ、は、あぁ～～～、我慢ッ、してるのにぃ――ッ！）
どんどんと灼熱が、ジュリエッタの尿道を下ってくる。
「ィイイイッ!!　はうぅううう……っ」
力んだあげくに太腿が痙攣し、その振動が尚更溢れ来る流れを加速する。

奈々子自身で脱ぎ下ろすその小さな布地の中から、薄紅に色づいた肉花弁がたっぷりの蜜を滴らせて綻び開き、乳臭さの混じった甘酸っぱい発情香を振りまく。
「ふぁああ……っ!!　なな、こ……」
恋人でもないクラスメイトの女陰を目にして、また理性が飛んだ。
「あぁっ、とうま、く……ンぁはぁああぁぁ――――ッ！」
悦びに打ち震える少女の満開した花弁穴へと、はち切れそうな極太の先端がめり込んだ。
ヌルヌルの膣口がもう喜びはしゃいで、くちゅくちゅと肉鏃（やじり）に吸い付いてくる。
その収縮する狭門を自らこじ開けようと、狂乱の発情娘が股ぐらを沈めて来る。
――ぬぶっ！　ぬずず、ずぶ……っ!!
「ふ、くぁ……あぁぁ、ああっ！」
めり込む刺激に眼鏡娘はいちいち身体を強張らせ、背筋を反り返らせる。
淫乱そのものの乱れ方をしている癖に、身体だけが処女の反応を示していた。
（玉井さんのっ！　奈々子のっ、もう、こんな締め付けてッ!!）
窮屈な穴にまだ半ばほども埋まっていない極太の先を圧迫され、冬馬の興奮も異常なほどに高まった。ペニスがいつもよりも気持ちよくてたまらない。
その過敏陰茎が狭穴の中で突き当たる。
（はう……しょじょ、まくっ!?）

自分はアリシアを愛している。
たとえ奈々子に想いを告げられても、応えることは出来ない。どうしようもない。
眼鏡娘の身体は奈々子自身のようだが、どうやら別の意志に操られている。
この状況で純血を奪われたと後で知ったら、彼女は絶望するのではないだろうか？
「くぅううっ、と、冬馬くんが、私の初めてにッ!!　う、嬉しいですっ！」
だが眼鏡娘は唇を引き結び、腰を一息に落としてくる。
――ぶづんっ!!　ずぶっ！　ぬずずずぅっ!!
「ヒゥッ！　く……ッ!!　あ、あぅううううっ！　はぁあぁ……」
亀頭を堰き止めていた薄膜がはち切れ、痛々しい破瓜の悲鳴が搾り出された。
冬馬に跨がる熟し切らぬ体つきが激痛に強張る。
だがそのまま剛直が奥へと埋まり行くに連れ、悩ましく緩む声とともにくねり出す。
「あ、はぁ。挿入り、ましたぁ。と、冬馬くんの。冬馬くんが、私を犯して、くれたぁ。ん……あ、膣内で、動いて、あ、はぁあぁっ!!」
ぬち……。くじゅ。ずぷ、……ぐぢょ、ずぶっ、ずぷんっ！
（玉井さんの方から、挿入させてきたのにっ!!　ふ、あぁっ！　そんな、動かれたら、余計、気持ちよく。はぁ、あああぁッ!!）
膣内の異物感を味わい尽くすように、少女の腰がくねりながら上下運動を開始した。

積極的な態度そのままに膣内も蠢き続け、奥から浅い方へと波打つように緊縮を繰り返し、肉襞が怒張幹にしがみついてくる。
「締め付けて、くるっ！　あ、ふぁあっ!!　玉井さん、の、奈々子のッ！」
たまらずに下から突き上げた。
「あひぃいっ！　冬馬くん、の、奥ぅううっ!!　あああ、はわぁっ！　ンンン〜ッ!!」
小柄な身体はすぐに奥にまで届いてしまい、子宮が拉げるほど怒張に圧迫される。
初めてにしては苛烈な突き込みだというのに、奈々子は冬馬が腰をはね上げるたびに尻をくねらせて歓喜に喘いだ。
――ぐじゅっ!!　ぐぢゅっ！　ぬぶっ!!　ぬぶぬぶぬぶぶっ！
子宮からも膣壁からも淫靡な粘液が涌き出し、冬馬の鈴口からの先走りと混じり合う。
窮屈な擦れ合いがにゅるにゅるになる。
「はぁあっ！　あぁああっ!!　奈々子の膣内（なか）ぁああっ！　くふぅうぅうぅっ!!」
「んひぁああっ！　あう、とうまくん、の、おちんちんっ!!　気持ちひっ、ィィイッ！」
木漏れ日が水面に煌めくのどかな池の畔（ほとり）。うららかな午後、休日に遊ぶざわめきが聞こえてくる中、あられもない快楽の嬌声を競うように張り上げる。
静けさを求めて誰かが散策に来れば見つかる。そんな危うさに背徳的な興奮を昂らせて交わり合う。彼女の姿をした彼女ではない何か。その疑惑もいまは些細（ささい）なことに思えた。

喘ぎが切羽詰まるほどに、はち切れそうに充血した極太が悩ましく押し広げられた肉穴に出入りする速度が増し、飛び散る飛沫も粘りを強くする。木々の青臭さに、甘酸っぱく爛(ただ)れた淫臭が混ざり合ってムンと噎せるように濃厚な香りを漂わせた。

「くぅううっ！　オ、オレ、もうっ‼　は、あぁぁああっ！」

「はぁああっ‼　な、なにか……く、る、あぁあっ！　冬馬くぅううんんっ‼」

性器を蕩けさせる発情液がそのまま肌から滲み出したような、ねっとりとした汗に全身を湿らせ、二人の身体が痙攣に見舞われた。

灼熱の塊が股ぐらの奥から狭い尿道を押し開いて勢いよく迫り上がってくる。

「つはぁああああぁぁぅ！　で、出ッ――‼　おあぁああああっ！」

――どぷっ！　びゅびゅるるっ‼　ぶじゅっ！　ぶじゅじゅうううっ‼

跳ね上がる腰で、ズンと奈々子の膣奥を思い切り突き上げた。

冬馬の打ち震える剛直ペニスから、白濁の奔流がぶちまけられる。

「ああ、あ、出てッ、るっうううっ！　い、いっぱい、おくっ‼　あぁああああっ！　私の膣(な)中(か)ぁ、冬馬くんの射精(で)てるぅうっ‼　あぁああはぁああぁぁ――――ひぁああっ！」

その熱く滾った激しい液圧に牝壺を打ちのめされ、奈々子の歓喜が頂点へと迫り上げられた。嬉しさに極まってだらしなく呆けた顔で狂おしく白目を剥き、眼鏡がズレるほどに全身を打ち震わせる。

（膣内ぁ、射精ちゃったぁ。で、でも、気持ちいいッのまだ、止まらないっ!!）
迸る前に抜くどころか、奥深くを抉るように突き入れてしまった。
想いに応えるわけにはいかない少女に申し訳なさを感じながらも、まだヌメリ穴に根本まで埋まった硬竿は脈打ち際限のないスペルマを垂れ流し続けている。
「あ、はぁ……。嬉しい、です。冬馬くん、の……いっぱい……」
狭穴に納まりきらず怒張肉との隙間から溢れ出る白濁を手で掬って、ねばねばと糸を引かせながらおかっぱ髪の同級生が喜びに浸る。
「でも、今度は、私が冬馬くんに、……いっぱい射精したいなぁ」
快感がいつまでもたゆたう心地よい気怠さに朦朧となる中、淫靡に揺らめく彼女の声が僅かに剣呑な響きを宿した。
「――えっ!? 玉井……さん、いま、なんて?」
なにかの聞き違いかと思った。朦朧とした瞳の焦点を合わせて、彼女の顔を見上げる。
「今度は、女の子の冬馬くんに……、私が、挿入れたいなぁ……!!」
公園のざわめきが消え失せていた。
妖艶な笑みを浮かべた奈々子の姿が、禍々しさを帯びている。
彼女が、彼女でないという疑惑を、いまさらのように思い出した。
空が、夜の闇に染まっていた。

「そんなっ！　こ、これってっ、夜会（ディナーパーティー）」
陽光を完全に遮る夜の結界。この中で不死者は存分に超常の能力を発揮出来る。
そして奈々子の股ぐらに、疣をいくつも隆起させた極太の肉竿がそそり立っていた。
「こ、この前の……っ!!　不死者（ストリゴイ）ッ！」
一度目はアリシアに連れられてのランジェリーショップで、二度目は学園へと襲来し、二度とも巡礼聖女の血で滅ぼされたはずの魔幻師（まげんし）、ゲオルグ・ヴァーンスタイン。
先ほどから奈々子に纏（まと）わり付いていた、澱（よど）んだ血の臭いが何なのか判明した。
「やさしく、してあげるから……ね……」
またしても身体の一部を切り離し逃れたのだろう。しかし奈々子に付着したその欠片は余りにもちっぽけすぎて彼女を喰らうことも出来ず、肉体の一部となって融合した。
それでも彼女の内に秘めた強い思いを暴走させ、求められるままにその形状を変化させたようである。少年へと見せつけるように少女が股間から生えた大きな幹を上下に扱く。
どびゅうっ!!
途端に、黒ずんだどろどろの雫が勢いよく噴き出し、驚きの余りぽかんと開いていた冬馬の口へと飛び込んだ。強烈な苦みとえぐみが舌を刺し、口いっぱいに広がる。
「――ふぁぶっ！　あぐぅぅっ!!　な、これ……、あ、がぁあああっ！」
思わず飲み下す。ネットリへばり付くような気色悪い喉越しに呻く。吐き出そうとする。

だがドクンと激しい鼓動が心臓を震わせた。異質感が全身に広がり、細胞が煮え立つ。
「う、あ、あぁあああぁっ!!」
巡礼聖女に欲情したわけでも、〝眠り人形〟を操れる少女の口づけを受けたわけでもないのに、身体が変わってゆく。
しかも、身体の構造を変化させられるその感触が、いつもより強引に感じる。
「あぁああ、うううう！　〝眠り人形〟に、されたぁ」
腕を伏せたような形が美麗な乳房が、シャツを押し破らんばかりに撓わになる。
ペニスが縮んで奈々子の膣から抜け出た。
見る見るうちに包皮に埋もれ、小さな豆粒と化して感度を格段に増す。
陰嚢も跡形もなく消え失せ、秘唇がぱっくりと割れ開いていた。
ヴァギナもしっかりと構成され、もうすでに疼く肉襞と子宮から官能の雫をたっぷり溢れさせ腰を落ち着かない脱力に導く。
「あはぁ、冬馬くん、また女の子だ。今度は私が気持ちよく、させてあげる、ね」
理性を失うほどの発情は、口奉仕をされた時男根に染み込まされた唾液が、ゲオルグの能力を宿し催淫効果をもたらしたのだろう。
飲み下した精液状の液体に〝眠り人形〟を強制起動させられ、冬馬の身体は女性化した。
「玉井、さん、や、やめ……。ひぅううっ!!」

ゲオルグの触手同様に、奈々子の股ぐらでいきり勃つ男根は、ぐねぐねと自在に蠢きその長さを伸ばしながら、濃厚な液にまみれて冬馬の下腹を這い回り出した。
焼けるような熱さで力強く脈打つ剛直に、感度を増したすべすべの腹を擽られ産毛（うぶげ）が逆立つ。鼠蹊部へと潜り込み女陰に接近してくる気配に息が詰まった。
「私と……一緒に、なってね……冬馬、くん」
ぬめぬめと這い回る奈々子の陰茎が冬馬の女陰を探り当てた。
「ひっ!!」
怖い。どうにか悲鳴をこらえるが、身体の震えが収まらない。しかし男の状態で奈々子と交わった快楽が継続しているのか、膣から愛液が止めどなく滴る。
「ああ、冬馬くん私の欲しがってる。こんなになっちゃったら、挿入れなくちゃ、大変だよ」
女性として先輩の立場から〝彼女（かれ）〟の発情具合を心配し、牝液にふやけた陰唇花弁を捲り上げる。くっぱりと開いて打ち震える膣口へと歪（いびつ）に先太った先端を宛てがってきた。
「ふわっ!!　やだ、こんな……は、う、ぅう、はい……って、はぁあンっ！」
怖いのに亀頭と膣口の粘膜同士がにちゅにちゅ擦れ合うと、甘い喘ぎが漏れる。
「あはぁあっ、冬馬くんンっ!!　おんなのこだぁ、かわいいッ！」
ぬぶぶぶぶっ！　じゅぶっ!!　ぶっ、ぢぃいいいん！　ずぶっ！　ずぶずぶずぶっ!!
「ひぎぃいいいっ!!　つはぁああっ！　いぃあっ!!　ふぁはぁああぁ――――ッ！」

疼痛を覚えたと思った瞬間、強引にその遮りが突破された。戸惑いを覚える余裕も与えられず、漲り狂う奈々子の突き込みに冬馬の処女膜が突破された。

（あ、あぁあっ!!　オ……、オレっ、玉井……さんに、しょ、処女ッ、奪われたっ!?）

女となった自分の初めての相手は、クラスの内気な女の子。

倒錯的な事実に思考が混乱を極める。腹腔に響く重々しい激痛が弾けた。だがそれもあっという間に、極太で襞肉をこじ開けられる切迫的な快感に塗り替えられる。

「あぁあああああっ！　とうまくんの、膣内ぁああっ、気持ちぃひぃいいいっ!!　んふぅうう、私の膣内で、とうまくんの、ひゅくひゅくしへるぅううっ!!」

「う、ぁあっ!?　動いちゃヤァッ!!　ンンッ、オレの、なかッ。や、だっ、だめぇえっ！」

硬い肉太にリズミカルなピストン運動を繰り出される。膣襞を捲り返される感触に飲み込まれそうになった。一突きされるたび、溢れる粘液と共に溶け崩れそうだ。

（オ、レ……っ！　女の子に、掻き回されて……ッ!!　あぁあああっ！）

玲音の指に弄ばれるよりも強烈で狂おしい快感が渦巻いていた。

女性としての快感に夢中になりながら、それでも自分は男であるという意識は変わらない。もしこの交わりの相手が男なら、気色悪さが先に立っていただろう。しかしいきり立った牡竿で力強く攻めてきているというのに、相手はクラスの女の子なのだ。

（気持ち……いぃっ！　男、なのに、膣内ッ、気持ちいいっ!!）

ゆっくりとした足取りに揺れ弾み、肉勃起が徐々に近づいてくる。
もう目が離せない。冬馬との接吻から唇を離し、喉を鳴らせて見入った。
「玲音。そんなに好きなの？　あいつのアレが」
呆ける耳に、口づけから放置された〝少女〟の不機嫌そうな声が届いた。
「なっ、そんな、ことっ。あ、あたしは……」
顔がカーっと赤らんで口ごもった。反射的に冬馬を睨みつける。
「――ひうっ⁉」
現実ならばあり得ない。〝彼女〟の姿が、いつの間にか少年へと戻っていた。
衣服も元の黒いベストにタイトなパンツの男のものだ。その股ぐらから、逞しく勃起した男根がそそり立つ。赤銅色の幹が、びゅくっ、びゅくっ、と打ち震えていた。
「あ、あああ、あ、あ」
思わずへなへなとへたり込んだ。
「オレのも見てよ、ほら。玲音を悦ばせようと思って、こんな大きくなってるんだから」
ぐいと突き出される発情肉から、濃厚な牡臭が鼻腔に染み入ってくる。
ユージーンもすでに間近まで迫っていて、酸味を帯びた生臭い二種の匂いが混ざり合って危険度を急上昇させた。
（あう、へんな、匂い……これ、おとこ、の）

嗅いだ瞬間から頭がぼんやりと蕩けて、身体に力が入らない。
発情した女の身体は、こうやっていとも簡単に男に犯されてしまうのだろうか？
「ふわぁ……」
思わず、きょとんとした顔で感嘆の声を漏らし、目の前に並んだ二本の勃起肉を見比べた。ユージーンの黒ずんだ牡肉は並外れた極太で、内に秘めた荒々しい武人の本性を現すように、幾本もの青筋が浮き出てごつごつと節くれ立っている。対する冬馬のペニスは元気いっぱいにふんぞり返り、赤銅色に充血した幹をはち切れそうなほど膨張させていた。
恐ろしさを感じさせない整った茸型だが、毒蛇を思わせる亀頭のカリ傘が大きく広がっている。あんなもので中を掻き回されたらと思うと狂おしい気持ちになった。
嫌悪感が完全に消えたわけでもないのに、男根を前にきょとんとした顔でへたり込む。
「ねえ、玲音、気持ちよくさせてよ。玲音のためにこんな硬くしてるんだから」
冬馬がツインテールの片方を掴んで顔を引き寄せ、頬に勃起肉を押しつけてくる。
「――ひうっ！　こ、このッ、ばか。やめ……。ふぇえ」
ねちゃっとカウパーに塗れた先っぽが頬に貼りつく。下衆な男たちに好き勝手にされた屈辱が蘇る。しかし掴まれた髪を優しく撫でられるとぐりぐりと押しつけられる亀頭をそのままにした。払い退けようと思えば出来るのに。
「私のものも、お前に愛されたくてこんなに猛っているぞ」

ツインテールのもう片房を愛撫しながら、白装の不死者までもが反対側のほっぺたに亀頭をめり込ませてきた。冬馬のよりも力強く、ゴツゴツとした感触。

「うぅ、ああ、あぁ。や、だ……から」

口では嫌悪を搾り出し顔はしかめられているというのに、身体が積極的に拒んでくれない。腰が抜けたようにへたり込んだまま、生臭い汁を滲ませる肉棒二本に気が強そうな美貌を撫で回されている。

（くう、匂い、凄い、これ。こんなんじゃ、あたまおかしくなっちゃ、う）

それでも、やはりこれは現実ではないということが直感として分かる。

恐らくは、心迷わせる契約者へ、魔神が仕掛けたたわいない悪戯。

それならば、と思った。どうせ夢なのなら。

幻覚であるなら、しかもまるで現実と変わりないリアルな感触を得られるのならば。

これまで、禁忌として節制してきた全てを体験することが出来る。

（この二人のなら、汚くない……きっと）

下劣な男共に強いられたときにはただ屈辱でしかなかった。しかしそんな状況でも身体の奥底では疼くものがあった。本能を揺さぶられる感覚を覚えたのだ。

そのときにはもう、玲音は冬馬の勃起肉を唇に咥え込んでいた。

「あうんっ！」

途端に女の子の様な甘い喘ぎを漏らして冬馬が悶えた。びゅくんと口腔でぬるっとすべやかな竿が打ち震える。味蕾に生臭い風味が粘り着きはするが、全然不快ではない。
「ん、あふっ！　こえあ、冬馬の、おひんひん。ん、んむう、はむんぅ」
窄めた唇で根本を締め付け舌先で裏筋を擽る。
早くも暴発しそうに脈動が激しくなった。
「ひ、あぁあっ。あ、うぅぅ……。そこ、気持ち、いい」
よろけそうになりながら小さく腰をグラインドさせ、冬馬が喘ぐ。
にゅぬぬぬぬ、ちゅぷんっ！
取りあえずこれは味見とすぐに少年の陰茎から口を離す。
今度は手持ち無沙汰に頤（おとがい）をなぞっていたもう一本を咥え込む。
「――んふぁあっ！　あふ……お、っひぃ……」
見た以上の大きさの違いが唇ではっきりと感じ取れた。ほんの先っぽ咥え込んだだけなのに、ユージーンはムリムリと押し込んで来る。あっという間に口いっぱいが占領され、噎せ返るような牡臭が鼻腔にまで抜けてきた。――恐る恐るしゃぶってみる。
「ひうっ!!　ふ、あぁ。ふご、い……。あ、んむ」
脈打つ勢いが荒々しすぎて上顎を押し上げられる。涎が一気に垂れた。
カウパーと唾液の混じったたっぷりの雫が、胸の谷間に生温く流れ込んでくる。

太さも並外れた〝白鎧〟の怒張は、ペニスに不慣れな修道女には過剰だった。それでも口中でのたうち続ける極太を必死に咥えて、亀頭溝を穿るように舌を這わせる。
「あぁ、心地いい。ようやくきみと歓喜を共にすることが出来た……。嬉しいぞ」
「――!! うきゅぅ、ゆ、ゆーひぃ、ん……。あ、む、ん」
熟成が進みすぎたチーズを思わせる刺激が味蕾に染み込んでくる。
えずきが込み上げる中、優しい言葉をかけられて気が遠くなりそうになった。
もっと彼を喜ばせようと不慣れな舌使いを一生懸命工夫する。
じゅる、ずちゅちゅぅ、ちゅぱ！ ちゅずずぅ!!
ぶよっとした亀頭を這い上がり尿口をくじるように舐め回す。
「そんな、ところまで……吸ってくれるのか。可愛い子、だ」
白装の美青年の息が荒くなった。髪を優しく撫でて誉めてくれる。
「オ、オレだって、玲音にずっとこうして欲しかったんだからな。けど、〝眠り人形〟なんかに変えられちゃったから、ずっと我慢していたんだぞ」
快感に浸るユージーンを羨ましそうに冬馬が勃起を脈打たせる。
いつもは口喧嘩が絶えない彼にそんなことを言われると、胸が高鳴る。
「あ、ぁ、とう、ま。らっへ、あたひ、ぴゆぐいむめいれんらから……。んぐ……」
わざわざ生き返らせてやった下僕などに言い訳する必要ない。なのに、ユージーンの男

根から唇を移して上目遣いに言う。
「な、舐めろよ。オレのも、もっと……」
小生意気な口調で命令される。それがなぜか興奮を掻き立てた。
ぬ、ぬりゅりゅ……ぬぷぅう。
息苦しいのを我慢して口いっぱいに頬張ると、ますます胸が高鳴ってくる。
「そ、そう、奥まで、もっと。ん……」
調子に乗りながらも情けなく声を揺らしてしまう冬馬の様がなんだか愛おしい。
猛々しい牡そのものな〝白鎧〟の強烈な勃起には、身も心も支配されるような魅力を感じる。だが冬馬のほどよい咥え心地と、淡泊な味わいのカウパーにはホッとさせられた。
ぬぽっ、ぶぐっ、じゅぷんっ!! ずぽぽっ、ずじゅるじゅるじゅる！
口蓋で竿全体を軽く圧迫しながら、頬を窪ませて吸い上げる。
「はぁっ、れ……いんっ、そ、それ……気持ちいいっ！ ふわっ!!」
途端に、偉そうな口ぶりだった少年が甘えた声で弱々しく喘ぐ。
「臭ぃ、汁……いっふぁい、垂れ流ひひゃっへ、冬馬の生意気ちんふぉ……」
今度は優越感が玲音を打ち震わせた。魚介臭さが鼻孔に抜ける汚濁汁を啜り込み、肉棒の裏側を舌全体でくるむように舐めてやる。
「ン……ああぁっ！ くすぐったいっ、けど、いいっ!! そこ、もっと強くッ玲音ッ！」

ちんちん舐めてやっただけでこのざまだ。あたしの眠り人形なんだから、普段もこんなふうに甘えればいい。そうすればもっと可愛がってあげるのに。

ぬぽっ、にゅぽっ、ぬぶぷっ、ぬりゅりゅりゅぅ。

刺激が増すと打ち震えるのが面白くて、窄めた唇で扱きながら舌を這わす。

「玲音……が、オレの、こんな、舐めちゃってるっ！　ふぁああっ!!」

身体を小刻みに震わせしがみついてくる。その重さに喜悦が込み上げる。

「彼のが気に入ったようだね。私のはもう舐めてくれないのかな？」

「ふぇええっ!?」

冬馬のペニスに夢中になっていると、ユージーンに拗ねられてしまった。

「あぁっ、いま、すごくよかったのに……」

慌てていっぱいに銜(くわ)え込んだ怒張から口を離すと、途端に少年にガッカリされる。

二本のペニスを握り締めて二人の顔を見比べた。

どちらもしゃぶって欲しそうに、期待の眼差しを向けて来ている。

「え、あ、だ、だって、あたし、一人、なのに……。二人いっぺんに相手なんて……」

困ってしまう。でも求められる喜びに胸がわくわくする。嬉しくて頭がくらくらする。

（こ、今度はじゃあ、ユージーンの……。で、でも、冬馬いま気持ちイイって、もうちょっと、舐めた方が……。ああ、だけど、ユージーン、待たせたらかわいそう……）

困った事態なのにキュンキュンと下腹の奥が興奮に疼く。熱い愛液がひっきりなしに膣から溢れ出て、だらだらと腿を滴り落ちている。
「は、早く、玲音。オレのもっと舐めてよ！」
「次は私の番だぞ。たっぷりと奥まで銜えて欲しいな」
二人とも勝手な要求をして急かしてくる。
「あう〜、も、もうっ!!」
じゅぷっ！　にゅるるるぅうっ!!　れろ、れろれろっ、ちゅぽんっ！
はむんっ！　ぬぷぬぷぬぷっ!!　じゅるるっ！　ずびびっ、ずぽぽぽぽぽぅっ!!
冬馬のカリ溝を唇で締め付け、鈴口を舌先で激しく穿ると、すぐにもう一本を深々と銜え込み大胆なバキュームフェラで攻め立てる。そしてまた少年の怒張を頬張った。
「はうっ、れ、いんの、舌ぁああっ！　根本も、もっと、はぁ〜」
「ン……ッ！　もっと、ゆっくりと、して欲しいな。せっかく、心地いいの、だから」
男二人が声を上げて身悶える。
「ふぁ、ん。あむっ、ん、ん、んんッ。はぁあ〜っ、わがまま、ひうなぁっ！　もう、舐めふぇあげないじょっ!!」
二つのペニスを交互にしゃぶり、身勝手な男共を叱りながら尻をくねらせる。
（あぁでも、冬馬も、ユージーンも、気持ちイイんだ。あたしに舐められて。はぁ〜）

それでも心地よさそうな喘ぎを上げられるとがんばってしまう。
ぐいと唇に硬勃起を押しつけられると、喜びが込み上げ女陰がふわんと緩む。
現実ではない、恐らくは契約の魔神がもたらしたのであろう幻想だと思うと、普段は心の奥底に押さえつけている欲望が解放される。
（覚えていないのに、昔のこと。それなのにあたし、ユージーンのことこんなに。それに冬馬。あたし冬馬のこと……も。だから、助けたりしたんだ）
正気に戻れば冗談じゃないと否定するようなことまで素直に認めた。
真偽などどうでもいい。そういう気分に浸りたい自分がいる。
（そう、ン……これ、現実じゃない、から。だから、しても、大丈夫、かも）
そして巡礼聖女である限り、決して許されぬ行為。
不死者を滅ぼす清き乙女の血を失うこととなる、男の物を膣内に迎え入れる行為を、この幻想の世界ならば味わえるのではと思う。
「ふぅ……ンンっ！　あ、あああぁ……ッ!!」
想像しただけで一気に興奮が高まった。
咥えていた冬馬のペニスを、勢いよく吸いながら舐め回す。
「ッあああぁっ!!　れ、玲音ッ！」
いきなりの快感に少年が、深紅のベールを被った頭を抱え込んで腰を突き出してきた。

「――ほがぁあっ！　あ、あぶぅううぅ――ッ!!」
せいぜい半ばまでしか頬張れなかった勃起肉が、ズブズブズブッ！　と一気に口の奥まで埋まり込んでくる。喉の奥を圧迫され苦しさに喘ぐ。まだ処女膜に守られている秘所へ挿入されたなら、こんな感じを味わうのだろうかと想像する。
――ぬぶっ!!　じゅるるるっ、ちゅずずずぅううっ！
「あ、はぁああっ!!　そ、それ、イイッ！　玲音の唇、イイよぉっ!!」
たっぷりと太幹に唾液を絡ませる。窄めた口で扱きながら抜き出すと、冬馬がたまらないと行った顔つきで腰をかくかく痙攣させた。
「んんふうっ、ゆーしぃんっ」
今度は白装の青年の極太を頬張って、舌の表面で裏筋を刮(こそ)げながら吸い込んでゆく。
ずるるっ！　ちゅじゅぅうっ!!　ずぼぼぼぉっ！
「はぁ～～ッ！　もっと、強く、吸ってくれっ!!　もっと淫らなきみを私に、あぁ」
強い吸引に頬の内側が竿肌へぴったりと貼りつく。ぬるぬるの粘膜と擦れる甘美に、ユージーンが陶酔の溜め息を漏らす。
どちらの肉も、根本までいっぱい迎え入れて丁寧に舐め回してあげた。
（ふぁああ、おちんちん。どっちも、かわいいよぉ……。おっきいの、あたしの、口いっぱいぃ。あ、はぁあ、おいしいの、ゆーじーんと、とおまの、おちんちん……）

朦朧とする。二人とも大好き。
にゅちっ、れろれろれろ、ちゅぱちゅぱっ！　むぐんっ!!　ずるじゅじゅるっ！
二人の亀頭同士を密着させ。玲音はせわしなく交互に二本の勃起をしゃぶりまくった。
「へぁがっ！　あ、ぶぁあぁぁっ!!　ひぅう、もぉッ」
二本をいっぺんに銜え込もうとして大口を開けるが、結局無理で憮然とする。
腹立ちを紛らわす様に、両方ともカリ溝を集中的に穿りながら、巡礼聖女は不意打ちに鈴口を強く吸い上げた。
――れるっ、れろろろ、じゅずううっ、ずっちゅぅううっ!!
「そ、そうだっ、心地よいぞ、ああっ!!　込み上げて……きたッッ！」
「ふぁああっ!!　玲音ッ、出る！　オレ、もう、出ちゃうっ!!」
たまらないといった様子で男たちが身を震わせた。
「ひぃんんっ、ふぁあっ、あ、はぁあっ！」
びゅくんと激しく脈打ってまた怒張の大きさが一回り以上増した。
両手で二竿をリズミカルに扱きながら、玲音は口元を涎とカウパーでべちゃべちゃに汚して、無我夢中に舌を躍らせる。
「あぁあんぐうっ!!」
――ぐぷぷんっ！　ぞぼっ!!　んぐむぶぅっ！

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

あとみっく文庫

立ち塞がるもの一刀両断！

聖女様（シスター）はチェーンソーがお好き!?　前代未聞の破戒少女があとみっく文庫に降臨！

ピルグリムメイデン

深紅の巡礼聖女

小説 狩野 景　挿絵 ぽち。

不死者を切り裂くチェーンソーの轟音！
紅い聖衣に身を包んだシスターが破壊と破戒を繰り広げる!!
ちょっとした好奇心で廃墟に踏み込んだ少年は
彼女の手により女体化され、下僕となってともに戦う運命に！
ラブコメもエッチもシスターにお任せ!!
鉄錆味の学園バイオレンスアクションに刮目せよ！

好評配信中！

仙獄学艶戦姫 NOBUNAGA!

ノブナガッ! comic

待たせたな

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中！

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

女幹部メル様のセカイ征服計画！

［小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫］

全国書店で好評発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー

イケない戦いの記録！

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ

彼女は夜の教室で……!?

宇宙海賊学園ブラックキャット

［小説：Kyphosus／挿絵：さしまかよ］

全国書店で好評発売中

生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!

海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①〜③
- 呪詛噛らい噛【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエルル
- 借金お嬢クリス ①〜3
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- ビルグリムメイデン ①〜②
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!